

管楽器のアトリエ

木管楽器のあの音色、金管楽器のこの迫力。もしこの世に管楽器が存在しなかったら、音楽はずいぶん違った姿になっていただろう。さまざまな音色や効果を得るために、古今いろいろな楽器が考案された。

時代の流れの中に埋もれてしまったものもある一方、オーケストラで使用されるようになったスタンダードの楽器は、時代の流れと共に改良され、発達してきた。

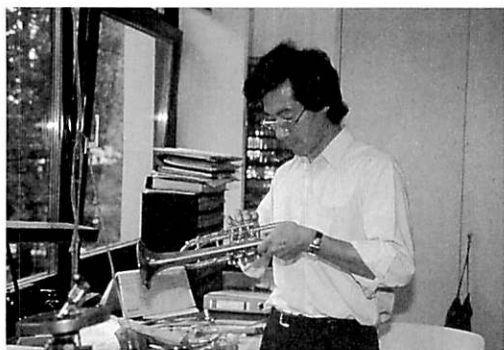
たび重なる改良によって楽器はより扱いやすくなり、自由な演奏ができるようになり、演奏時の安定性が高められた。でも楽器に手を加える代償として、音色そのものが犠牲になってしまいう事も少ない。

ところで、管楽器ではメシが食えない、というのが巷の通説だ。プラスバンドはアマチュア団体がほとんどだし、オーケストラの数にも限りがある。給料をもらえるポストが絶対的に少ないのだ。

結果、管楽器プレイヤーの数はピアノやヴァイオリンなどに比べると格段に少ない、という事になる。唯一の例外はフルートで、この楽器だけはレックスプロになっても、運が良ければ何とかやっていける。

楽器を演奏する人が少ない、つまり楽器が多く売れない、となると、その楽器にかけられる開発費が削られ、あげくの果てに楽器そのものの製造が中止されたりするのが、資本主義社会の悲しい現実である。

音楽の伝統では他にひけをとらないヨーロッパでも管楽器製造は経営が困難で、トップオーケストラの要求を満たす優秀な製品を手



楽器の調整を行うヤマハ・オーストリアの河村氏

に入れるのがむずかしくなりつつある。特にウィーンシステムと総称される独特の楽器を現在も使用しているオーストリアのオーケストラで、その悩みは深刻だ。

ウィーンフィルをはじめとし、当地のオーケストラで使用されるオーボエ、クラリネット、ホルン、トランペット、それにトロンボーンは、現在でもウィーン方式のものが一般的だ。

ウィーン方式の管楽器とは「今日の便利なメカを装備しない、少し時代遅れの楽器」と言っても、当たらずとも遠からずだろう。ただそれだけ音色が人間的なのが、かけがえのない魅力となっている。しかしこれらの楽器を作ってくれる職人がもういない、というのが大きな悩みだった。

それを使用するプレイヤーの数が世界的に非常に少なくなってしまったため、楽器を製造販売しても儲からなくなってしまったのだ。

第二次世界大戦以前は、ドイツとオーストリア、という大きなマーケットがあったため、メーカーも力を入れてこれらの楽器の製造と開発とに携わっていた。

しかし敗戦によって一般経済が枯渇してしまった事とあわせ、ドイツも東西に分割され、各地に優

新モデルの開発
に携わるウィーン・フィルのト
プ・トランペット奏者、ジンガー
氏

アトリエの風景





ウィナー・トランペット

ウィナー・トランペットの新旧
両モデル

ワグナー・チューバ

れた工房を持っていた管楽器製造業者は、衰退の道をたどる一方だった。

ウィーンにも優秀な職人はいたが、売れないものは作る気もおきず、楽器の質が低下する上に職人の数も減り、修理さえも思うにまかせないような状況になってしまった。

その上、ヴァイオリンなどと違って、管楽器には寿命がある。トランペットのような金管楽器でほぼ30年。これがその楽器をステージで使用できる限界なのだ。うだ。

困りぬいたウィーンフィルのメンバーが最後に相談をもちかけた相手がヤマハだった。17〜18年前の事になる。

ヤマハの研究室では、まずウイ

ーンモデルのトランペットとホルンの開発が、1973年頃からは行われた。その後1977年からはウィナーオーボエの開発も追加される。採算は度外視した試行錯誤の連続だった。

完成したオーボエは非常に優れた性能をもったもので、ウィーンのオーボエ演奏者を約30人とすると、現在そのほぼ半数のプレイヤーが、ヤマハ製のウィナーオーボエを愛用している。

トランペットをはじめとする金管楽器も同様の完成度を持ち、実際に毎晩のステージで使用されている。

暗中模索の中から始まった開発は、まず既存楽器のコピーから始まった。だが数少ない貴重な楽器は、それを分解して計測するわけ

にはいかない。レントゲンを撮ったり、その他さまざまな方法で楽器の外径や内径を計測し、それをもとに設計が行われる。

その後の研究、アーティストの熱心な協力、そして技術スタッフの聞くも涙、語るも涙の努力によって、単なるコピーや昔の銘器の代用品でないばかりか、既存の楽器が持ち合わせていた短所までもクリアした、以前のものより一層優れた世界最高のウィーンモデルが日本人の手によって完成したのである。

ウィーンにあるヤマハ・ミュージック・オーストリアには、コンサートホールなどとともにこれら管楽器のアトリエがあり、修理はもとより、さらに優れた楽器の研究開発が日夜行われている。